



縄文時代の循環型社会

そもそも「循環型社会」とは、現代の消費型社会が引き起こした社会問題に端を発して志向された考えで、「廃棄物の抑制・再資源化・適正な廃棄物処理・天然資源の消費抑制などの活動を行う（＝環境や省エネに配慮して資源を大切に使う）ことにより、環境への負荷を低減した持続可能な社会」のことを指しています。

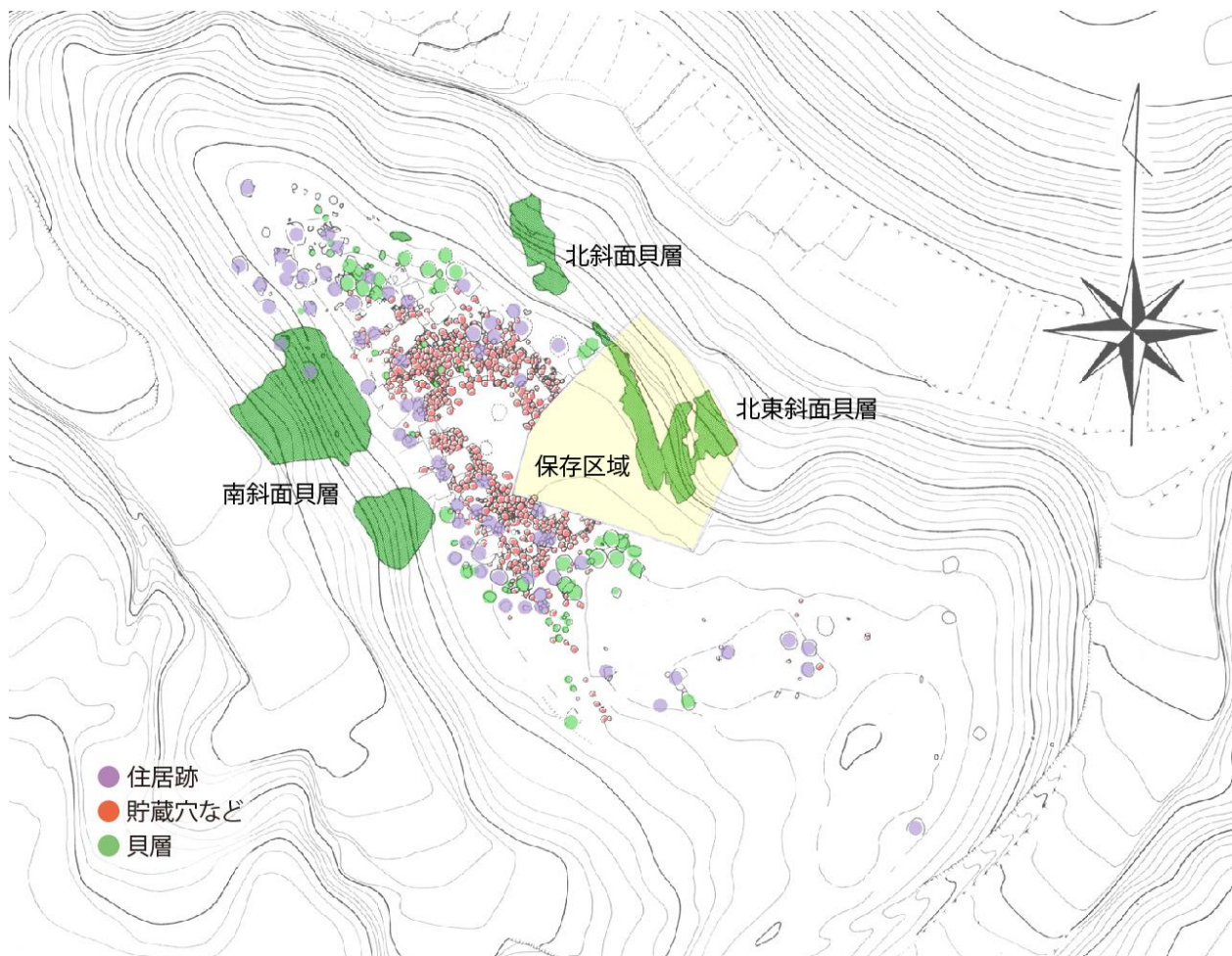
しかし、消費型社会が引き起こした「大量の廃棄物」・「天然資源の枯渇」・「環境破壊」などといった社会問題や、これに対する持続可能な社会を目指そうとする試みは、なにも現代社会に限った話ではなく、元をたどれば縄文時代にもその片鱗^{へんりん}を見ることができます。

第Ⅲ部の展示では、千葉市有吉北貝塚の発掘成果をもとに「縄文時代の循環型社会」について紹介しています。第3・4回の「見どころ解説」では、この「循環型社会」について、現代社会にも通じる社会問題という観点から「縄文時代ではいかにして持続可能な社会を目指そうとしたのか」を考えてみたいと思います。

拠点集落の社会問題① ー縄文時代のゴミ事情ー

縄文時代中期の中頃には、東京湾東岸地域に大規模な貝塚を伴う集落が相次いで現れます。これらの集落は、中央の広場を囲むように多数の住居跡と貯蔵穴が環（円）を描くように分布することから「環状集落^{かんじょうしゅうらく}」と呼ばれ、たくさんの人々が長期にわたって定住的な生活を送った拠点集落だったと考えられています。

千葉市有吉北貝塚もそのひとつで、集落の4分の3ほどを調査した結果、環状に配された住居跡 146 軒と貯蔵穴 590 基が見つかったほか、集落の周りにある斜面部からは、食糧残滓^{しょくりょうざんし}（食べかす）などのゴミを廃棄した貝塚（斜面貝層）が発見されました。



有吉北貝塚遺構分布図

一定の居住地を持たずに移動を繰り返して生活していた旧石器時代の人々や、縄文時代でも頻繁に居住地を移動していた頃の人々にとっては、“長期的な居住計画を立てたうえで、住居を構えたり、ゴミを捨てる場所を選ぶ”などという必要はありませんでした。しかし、長期にわたる定住生活を選んだ有吉北貝塚の人々にとっては、これらのこと、特に食糧残滓をはじめとするゴミ処理の問題は重大な社会問題となったことでしょう。環状に配された住居跡などの遺構群やゴミを廃棄する場所（貝塚）を斜面部などに限定していたことから、集落構造の企画性・計画性をうかがうことができます。

また、ゴミ事情に関連して、住環境の整備について、拠点集落とその周辺の小規模な集落を比べてみると、興味深い違いがあることがわかりました。数軒の住居跡が発見されているだけの小規模な集落では、住居の床面付近に石器や土器片錘の製作痕跡を残す例や、割れた土器などの遺物や貝殻が廃棄されたまま埋め戻されずに放置された例がしばしば見られますが、拠点集落である有吉北貝塚では、このような例はほとんど見られません。使わなくなった竪穴住居などを窪地のまま放置せずに、貝殻や土器片などのゴミと共に土砂で平坦に埋め戻すといったように、住環境の整備を行っていたことが発掘調査によって明らかになったのです。

上記のような、遺構の中に廃棄された貝層を専門用語では「**遺構内貝層**」と呼びますが、集落のどの場所に遺構内貝層が残されているかに着目してみてください。遺構分布図からは、緑色で示した遺構内貝層が、環状にめぐる遺構群の外側に近いところに分布する状況が見てとれます。これまでの縄文集落研究によれば、環状集落における居住域は、「外帯（外側）から内帯（内側・中心）に向かって次第に縮小していく」傾向があることが指摘されており、有吉北貝塚の遺構内貝層が外帯に集中することはこれと調和的と言えます。つまり、「持続可能な社会」を目指すうえで「ゴミは居住域の外側の決められた場所に捨てましょう」というような現代にも通じる社会的なルールがあったことが、貝塚のあり方から明らかになったのです。

なお、令和2年1月11日から始まる袖ヶ浦市郷土博物館での展示では、竪穴住居跡の中に残された遺構内貝層の実物を剥ぎ取って保存した「**遺構内貝層接状剥離断面**」を展示していますので是非ご覧ください。



北斜面貝層の堆積状況

遺構内貝層の堆積状況

